

文芸特別企画展

没後五〇年

『小平雪人と諏訪の俳人たち』

会 期 平成二〇年九月一三日（土）

平成二一年三月一日（日）

主催・会場 茅野市八ヶ岳麓文芸館

凡 例 本書は企画展にあわせて作成した図録に、展示したパネル原稿を加え、再編集したものです。

企画展開催にあたり

茅野市制五十周年、八ヶ岳総合博物館創館二十周年を記念し、八ヶ岳嶽麓文芸館主催の『没後五十年・小平雪人と諏訪の俳人たち』の開催にあたり一言ご挨拶申し上げます。

小平雪人は当市湖東の上菅沢に生まれ、慶応義塾に学びながら芭蕉の俳風の正統を伝える阿心庵永機に学び、「雪人伝説」というにふさわしい麒麟児ぶりを発揮して令名東都にはせる存在でした。正岡子規もそのような雪人を高く評価し、執拗に自派への加入を説いたとのことです。

明治三十年、二十六歳にして様々な理由により帰郷、以後六十余年にわたって諏訪に住み続け、本業の俳句のほか郷土史、民俗学、考古学研究や書画骨董の鑑定など幅広い分野で活躍した巨人でした。酒を愛し清貧を旨として、「最後の文人」というにふさわしい八十七年の生涯を送りました。

雪人が旧俳諧の諏訪のトップ（盟主）であり得たのは雪人個人の偉大さに因るのみでなく、それを支えた幅広い裾野の人々があったからです。集落々々には俳句の結社があり、雪人の指導を仰いだ結社も沢山あります。南大塩の宮坂英式尖石考古館館長が属した「牧馬会」などもその一つです。雪人の旧派の俳諧は「自己の発見」や「人間探求」を旨とする近代俳句と異なり、従来の伝統を重んじ、風流風雅をモザイクのように織りなすものでした。そこには風雅に遊ぶ潤いと社友と遊ぶ楽しみがありました。人々は俳諧、俳句に打ち込むことで日々の労苦、世俗のせちがらさを忘れ得たのです。

雪人の活躍する以前、江戸時代から諏訪には俳諧の伝統が根付いており、明治以降も芭蕉の俳風はもとより、子規を祖とする近代俳句も盛んでした。

当企画がそんな諏訪の俳句世界を知っていただける一助となれば幸いです。

平成二十年九月

茅野市八ヶ岳総合博物館

茅野市八ヶ岳嶽麓文芸館

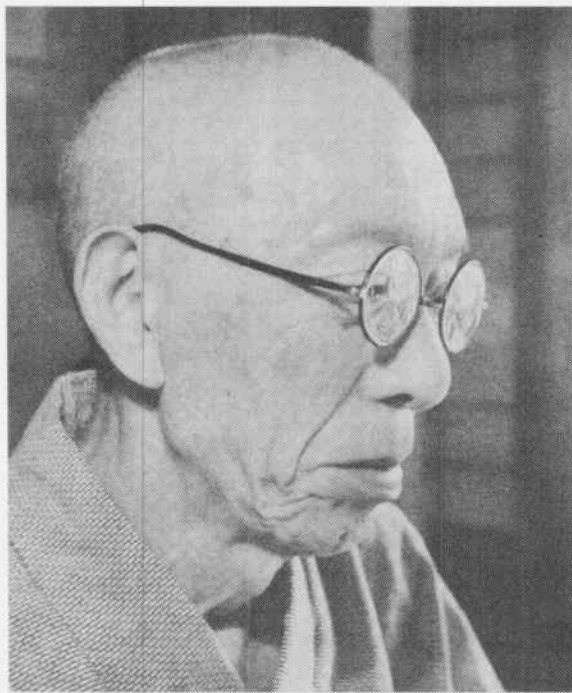
館長 茅野靖夫

茅野市制施行 50 周年・八ヶ岳総合博物館開館 20 周年記念

八ヶ岳麓文芸館特別展

没後 50 年

小平雪人 と 諏訪の俳人たち



晩年の雪人



長田平次作 小平雪人像

木刀俵（いとう） 雪人
神の屋のまの氷

水晶代文鏡
墨（すみ） 吉書（きちしょ）



本年は明治、大正、昭和の三代にわたり

諏訪地方を代表する俳人として活躍した小平雪人（一八七二〜一九五八 茅野市湖東上菅沢出身）が没して、五〇周年にあたります。今では雪人の名を知らぬ層が増えており、また生涯、業績、意義を知る人も多くはありません。

雪人が諏訪の俳壇の盟主として君臨しえたのは、雪人個人の偉大さに負うだけでなく、雪人を頂点とする多数の俳句作者、愛好者の層があったからです。

企画展では雪人の俳人としての軌跡を中心にしながら、俳句を支持した人々、民衆にとって、俳句はいかなる意味を持っていたかを探っていきたいと思えます。

雪人の俳句は芭蕉以来の伝統重視の世界であり、子規以来の近代俳句とは大きな違いがあります。近代俳句史からは全く無視されながら、諏訪地方を中心に多くの門弟が雪人に直接指導を受け、新聞の俳句欄で選句を受けた人は無数にいます。そうした民衆にあつて雪人や雪人俳句は何が魅力であり、彼らが俳句に求めたものは何であつたかを解明していきます。

俳諧概説

室町時代末ころ、連歌の中の滑稽（こっけい）を主とする俳諧連歌から独立した。数人で五七五と七七を繋（つな）いで一つの作品世界を作る連句と、連句の第一句が独立した発句（ほつく）とがあった。

はじめは言語遊戯的性格が強かったが、江戸時代に入り松尾芭蕉によって中世芸術理念である「寂」||「閑雅（かんが）・枯淡（こたん）の美」の世界を追求することで芸術の域にまで高められた。

しかし次第に低俗化し、多くの弟子を集めて俳諧を生計の具とする宗匠が出現し、夫々の流派に細分化し、雪中庵・春秋庵・二六庵などと称し弟子から弟子へと受け継がれた。

明治になり、正岡子規は文芸は個人に立脚するものという西洋の文学理念に則り、連句を排除し、発句を俳句と改めて近代化を図った。



吉川秀山による雪人画像でもっともよく面影を残しているという。酒盃を手にする雪人は何よりも酒を愛する人であった。若い日は大酒して野宿する日もあったという。

若き日、東都の俳壇の麒麟児として令名を馳せ、貴紳と交わりながら二十代半ばで故郷に隠棲したのは兄小平治の急逝による家督相続に困るだけでなく、雪人の人生観にもあったと思われる。晩年にいたって帰郷を「東京から逃げてきた」としばしば洩らしたという。何から逃れてきたかは詳らかではない。師としての軋轢、放蕩の精算、子規派との確執など考えられるが、雪人の以後の生き方を考えると貴紳と交わる華やかさから逃れてきたとの解釈も成り立つ。

俳句一筋、筆一本の清貧に生きた故郷五十年の生き方がそれを証明している。雪人は中世以来の文人の生き方を示した最後の人であり、俳句を文学と考える昨今の見方にはそぐわない存在であるといえよう。

諏訪俳壇旧派の巨匠

小平雪人（せつじん）

明治五（一八七二）年〜昭和三十三（一九五八）年

湖東村（村制が敷かれたのは明治八年）上菅沢の医家に禎三・多よの次男として生まれる。本名探一。

中村学校（下等小学・中等科）の後南大塩学校の高等科を卒業、後上京（明治十九、二十、二十一年の三説あり）し、成立学舎を経て明治二十二年三月慶応義塾正科に入学（慶応義塾大学文学部とする本が多いが、大学になったのは大正七年の大学令による。ただし明治二十三年一月大学部が発足し、文学・理財・法律の三科が創設されたが雪人は在籍していない）。大学部発足に伴い正科・別科は普通部と呼ばれ、雪人は明治二十五年二期より正科から別科へ転じ、翌二十六年三月普通部卒業。

在学中芭蕉の弟子其角の直系である穂積永機（一八二三〜一九〇四其角堂七世↓阿心庵↓老鼠堂）に俳諧を学び熱中する。福沢諭吉（俳号雪池）に可愛がられ『竹縁や二つ行き交ふ蝸牛』は賞賛されたという。

卒業と同時に立机（りつきき・一人前の宗匠となること）を許され、永機の養子となった。芝公園の紅葉館内にある阿心庵に起居し、業俳（職業俳人）として貴紳らと交わった。（立机とともに阿心庵継承とする本が多いが、明治二十八年までは永機が阿心庵を名のっており、阿心庵継承は『東京日々新聞』の「文苑」欄、『時事新報』の「楓山日抄」欄の主宰者となった明治二十九年中であつたと推測される。また前記二紙に明治二十二年俳句欄を創設し、新聞俳欄の嚆矢（こうし）とすると記す本があるが、二紙ともそのような欄は当時見当たらず、慶応入学の年を考

慮すれば現実性は乏しいと言えよう。なお明治三十年「俳諧同士倶楽部」の発足に際し老鼠堂永機、阿心庵雪人の名が見られる。）

森鷗外の未定稿のうち「今の俳派の別左の如し。日本派、秋声会、大派、雪人派」とあり、明治二十六、七年の執筆と推定されているが、秋声会の発足は明治二十八年十月であり、実際に活動を始めたのは翌年からであつて鷗外の文はその年か翌三十年にかけてであろう。さすれば雪人が阿心庵を継承し、二紙の俳壇の主宰者となつたのと時間的に合うことになる。

雪人の活躍は俳諧革新を目指す正岡子規をして目を見張らせるものがあり、日本派（新聞『日本』に依る子規一派の称）への参加を度々要請したが雪人は伝統俳諧を守る正統派（蕉門の直系）として断っている。当時の俳壇からすれば旧派が支配的であり、子規の『日本派』は書生俳句に過ぎなかつた。俳壇のホープとして貴顕に交わり、得意の絶頂にあつた雪人にとっては片腹痛いことであつたに違いない。

明治二十八年、長兄小平治（明治元年生まれ。長野師範で保科五無齋と同期。さらに東京高師を卒業し長野師範教諭、坪井門下の考古学者）が急逝。小平家を相続せねばならぬ立場となる。

明治三十年、兄の遺品を収蔵する「龍谷文庫」の設立に尽力。永機とともに俳諧文庫（博文館発行）の『芭蕉全集』の校訂出版。また『読売新聞』に「近世俳人譚（ものがたり）」を二十回連載し『沢庵和尚全集』を編集するなど旺盛な活躍をみせたが、師永機との確執もあつてか帰郷することとなった。

以後雪人の編著には次のようなものがある。

其角全集（明治三十一年 永機と校訂）

笠家庵全集（明治三十四年）

正阿句集（明治三十四年）

竜門紀伝（大正四年より『信陽新聞』に数年間連載）

阿心庵句帳（大正十年）

諏方大明神絵詞（校訂、大正十三年）

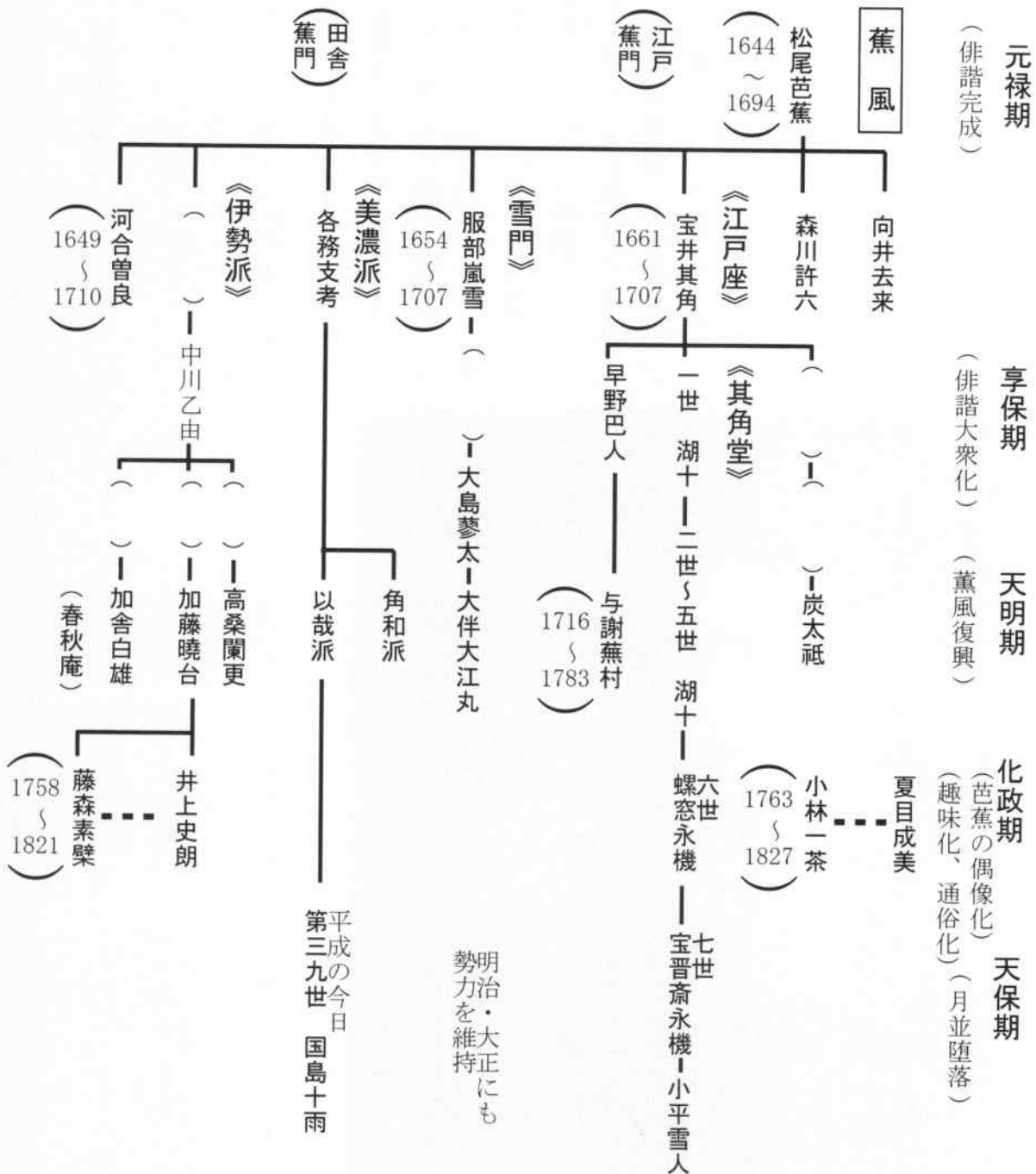
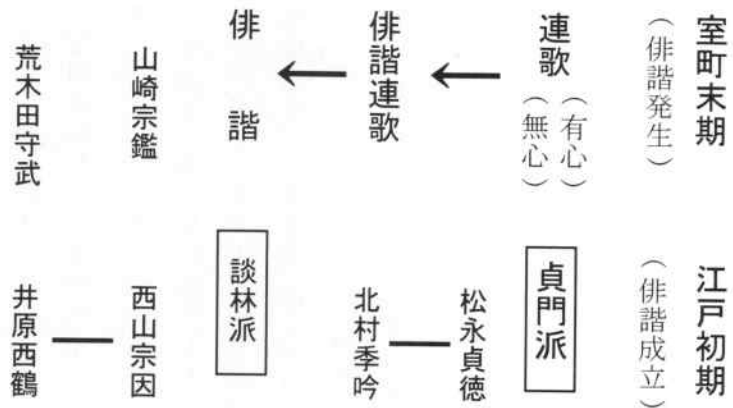
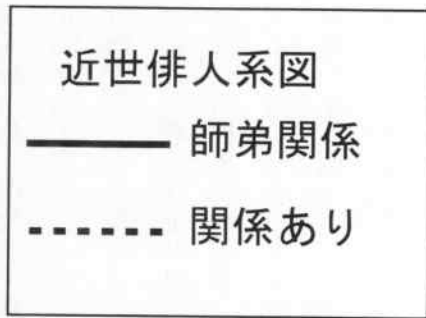
雪人俳詩（昭和十九年）

素壁句集（昭和三十一年 雪人補）

明治三十六年から三十九年まで冬期間の山浦地方の子弟の教育のため「湖東義塾」を開塾。明治四十二年老岐勝本にて曾良二百回忌を行う。ところが、明治四十三年大逆事件発生に伴い慶応義塾時代福沢諭吉の別荘で顔馴染みだった幸徳秋水に爆裂弾製造の宮下太吉を紹介したとの嫌疑を受け、以後七年間尾行がつき、和歌山、長崎、新潟などを遍歴し大正三年諏訪の湯の脇に移り住む。『信陽新聞』『南信日々新聞』の俳句欄選者を担当し、句会の指導等諏訪俳壇の巨匠として君臨した。雪人は近代的な意味での文学者、俳人ではなく、伝統の風雅を固守する最後の『文人』であった。酒を愛し、清貧の中悠々自適に生きて昭和三十三年数え年八十七歳で没した。考古学、郷土史、美術品鑑定などにも秀でていた。

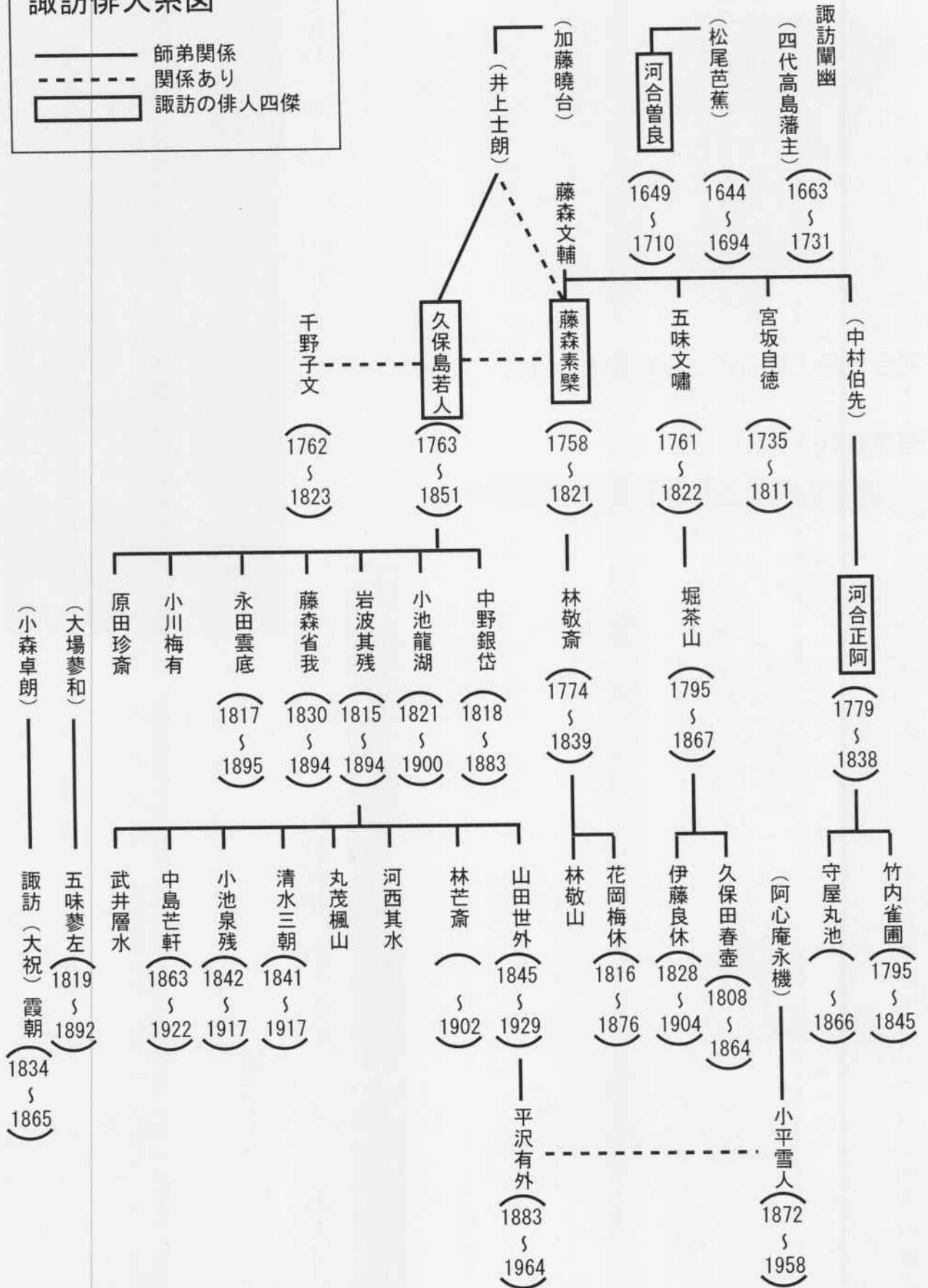


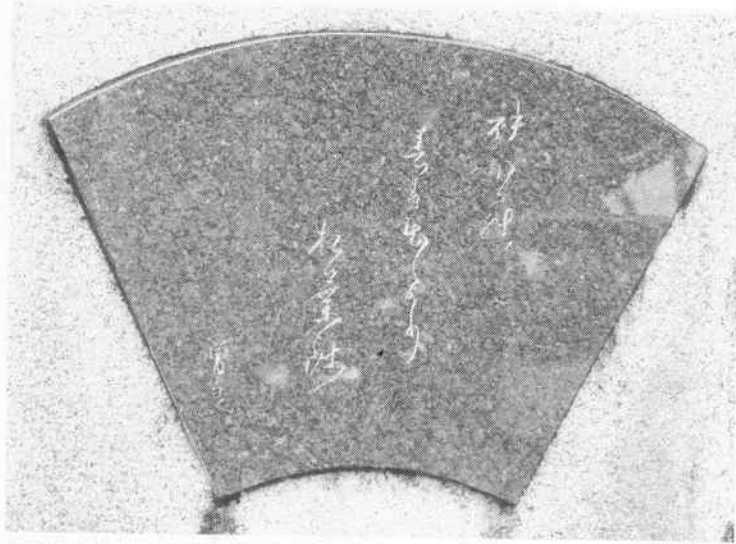
若き日の雪人



諏訪俳人系図

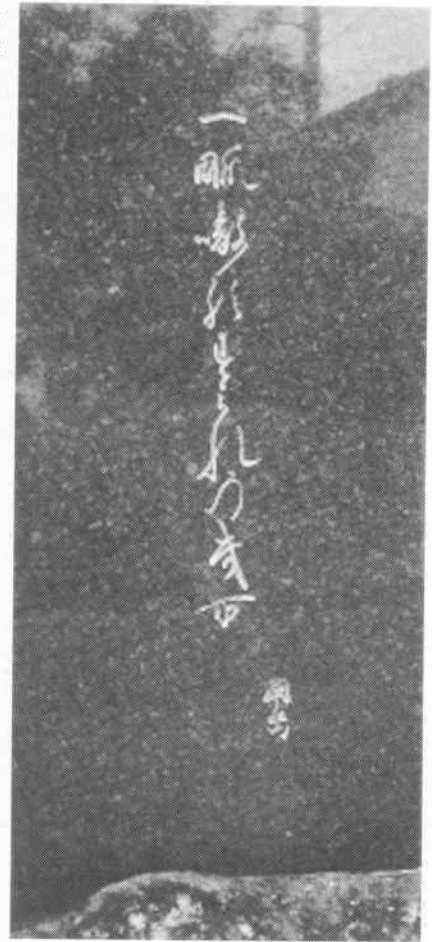
——— 師弟関係
 - - - 関係あり
 □ 諏訪の俳人四傑





河合曾良 (諏訪市文学の道公園)

諏訪闇幽 (諏訪市文学の道公園)



岩波其残 俳画



なやひのしんがらふたつとや山桜

中野銀岱 散りそむる うらとおもてや 山桜

藤森素壁 奥の細道巡行図



小平家系図

初代

理兵衛

定五郎

六代

貞五郎

多よ

正保4(1647)年南大塩村より上菅沢新田草分けとして入植。堰の改作に尽力。93歳で没。医業を家業とする。

寛政3(1791)年の文書に名主として見える。

1814～1893。医師、手習師匠で松圃と号し、筆塚がある。

七代目
禎三

1845～1930。医師。玉川より入婿。湖東村長。

一) 画家。

寛江(一八八一～一九五

四) 千葉医専卒。医師。

定太(一八七九～一九五

一) 千七七七～一九五七)

けい(笠原氏)

てい(木川氏)
(二八七五～一九四五)

探一(一八七二～一九五

八) 慶應義塾卒。俳人。

覚者。

龍谷と号し、考古学の先

等師範卒。長野師範教諭。

九五) 長野師範・東京高

小平治(一八六八～一八



家の小平家の薬箱



前列父母、後列左より3人目雪人

慶應義塾 入社帳 明治二十二年度

本人姓名	小平 弥一
本籍身元	島根県松江市
生年月日	明治六年七月
入社年月	明治二十二年七月
証人姓名	田中 邦彦 大友 茂八
同上	

勤惰表

明治二十二年第二期
慶應義塾勤惰表

姓名	岩田 鏡吉
別科卒業	改探一
...	...

姓名	渡邊 春三
...	...

入社帳、勤惰表、姓名録とも名前が弥一（本名探一）となっており生年も六年十一月（正しくは五年七月）となっているが、徴兵の危惧から故意のものと思われる。これを卒業に際し探一と改めている。

「勤惰帳」は今日の成績表であり、英語を中心に当時の最先端の科目が並んでいる。必ずしも成績がよくないのは、出席を加味しているからで、雪人は師永機のもとで俳諧修行に力を尽くし、また師に従って全国行脚も多く欠席が多かった。とはいえ、旧派の俳人には珍しく、西欧の近代的教養を根底にした雪人の存在は骨格の太い構成を持つていた。

卒業名簿（左下）

別科卒業「改探一」と本名に改める。

慶應義塾 特選員 卒業生 姓名録 現在生

姓名	...
...	...

姓名	岩田 鏡吉
...	...



雪人
の句

夜や秋や
思ひ
惑はで
月一つ

雪人初期の句

(子規を驚嘆させた頃)

明治二十九年

起きて聞け猫恋ふる夜の明月記
友にせん李は花の痴なるもの
藤だなを鼠の渡る月夜かな
蝸牛(かたつむり)のぼりかけても竹箒
古郷や衛門あれて枳(き)穀(こく)咲く
鼓鳥なれも我門狂居士か

明治三十年

鉢叩名を聞くことの長かりし
春の夜や枕の高さ小三寸
春の夜や大雅の筆の行処(ゆきどころ)
酒くさき其角頭巾や宵の春
行春に負はせやならぬ酒債哉

同じ頃の子規の句

明治二十九年

のどかさや千住曲れば野が見ゆる
寝て聞けば上野は花のさわぎ哉
汽車過ぐるあとを根岸の夜ぞ長き
北国の底は長し天の川
いくたびも雪の深さを尋ねけり

明治三十年

雲無心南山の下畑を打つ
つり鐘の帯(へた)のところが渋かりき
三千の俳句を聞(けみ)し柿二つ
萩咲いて家賃五円の家に住む
聳えたつ枯木の中や星一つ
虚子を待つ松茸寿鮓(ずし)や酒二合
吉原の太鼓聞ゆる夜寒哉

雪人(旧派)の特色

伝統的な俳諧の理念に忠実に作った俳諧世界。そこには芸の世界はあるが、作者独自の自然観や人間性を反映するといった近代的文学要素は無い。茶道や華道と同じ芸道の次元の世界である。

子規(新派)の特色

俳句を近代(西欧)文芸に属するものとしてし、伝統的、観念的なタイプ(類型)を否定し、自分の発見を大切にし、その方法として「写生」を主張した。

明治二十九年頃より病臥がちの自分の生活、境涯を反映した句が見られるようになり、深みを増した。

雪人の句が現在顧られないのは近代文学的要素に全く欠けているからである。

穂積永機 (一八二三—一九〇四)

六世其角堂の子として江戸に生まれ、上野、

向島等に結庵し明治三年其角堂七世を襲名、後これを弟子機一に譲り、芝公園内庵を結び阿心庵(其角の庵号)と号し貴紳と交わり名声が高かった。雪人はこの時代に永機に師事して俳諧を学んだ。明治二十年代後半雪人に阿心庵を譲り老鼠堂と名乗り、雪人を養子としたが小平治の死により解消された。幕末から明治へかけての旧派俳諧の大御所的存在であった。

雪人の半切類

雪のりや比半の共れ〜法筒
 しいほとく人乃纏れや半の〜也
 昭和丁丑青筒音雪人録於依為帳

雪の日や人の呉れたる湊筒 他

不二晴れる雪中の春を領しけり
 人乃日や竹の養子の翫と梅
 芹浮け芹こゝる春のふ〜ふき

不二晴れて雪中の春を領しけり 他

ホウ〜や作を量のは十萬竿
 冬こもり一羊裘をたからかな
 昭和丁丑青筒音雪人録於依為帳

冬こもり一羊裘をたからかな 他

郭仲晦謂劉信叔曰文章華當以簡易
 簡以制繁易以制難便不費力就坤之大
 所以使萬物由其宰制者不過此二字况於人乎仲晦
 以論之謂洞先王設物之德且以用兵言之韓偓之辨
 一簡字狀云襄夜半破鹿菴開一易字
 年 九月十日 人集如
 在竹之也 雪洲雪人錄

句は雪人 草の戸や十日の菊に人集め

木 竹 十萬竿
 木がらしや竹を描かば十萬竿

木がらしや竹を描かば十萬竿

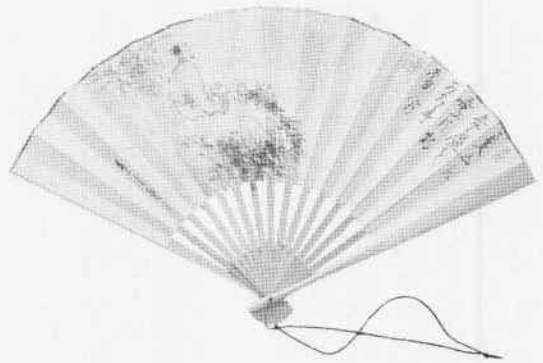


句雪人 書舟鶴 絵西崖

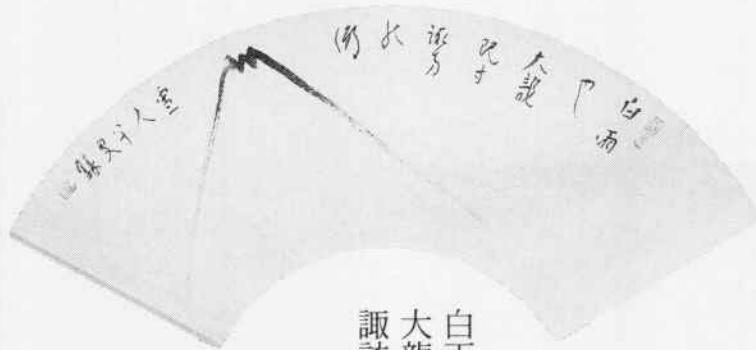
扇面



古里や
軒端にかかる
天の川



夏山に我蘆を
愛すひとり哉



白雨や
大龍現す
諏訪の湖

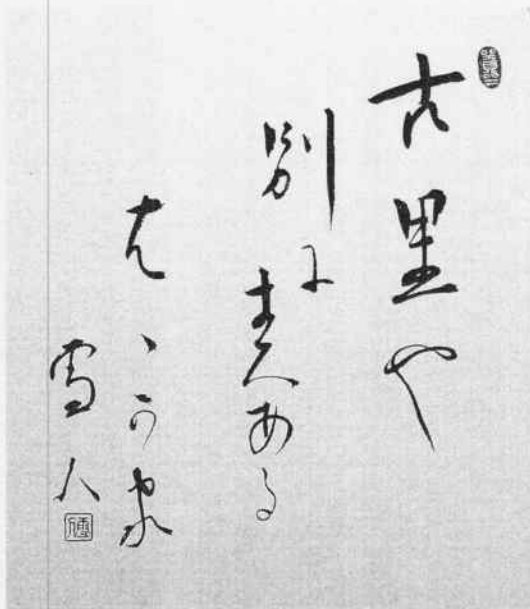


太平を
老の願ひや
菊の花

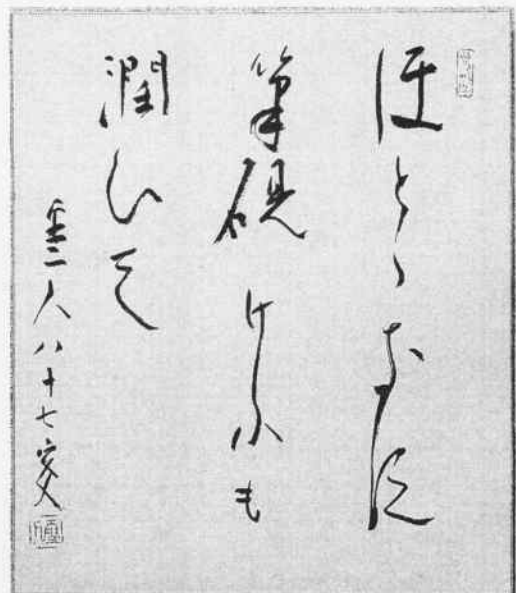


同門に
及第多し
更衣

色紙



古里や別に春あるはが家



ほととぎす筆硯けふも潤ひて

新類
農村
新年
氏人の曉起や雪人
飯ころめ

氏人の曉起や飯はじめ

粥杖ふ伐りー 雪人
木杵を伸いれ

粥杖に伐りし柳は伸びにけり

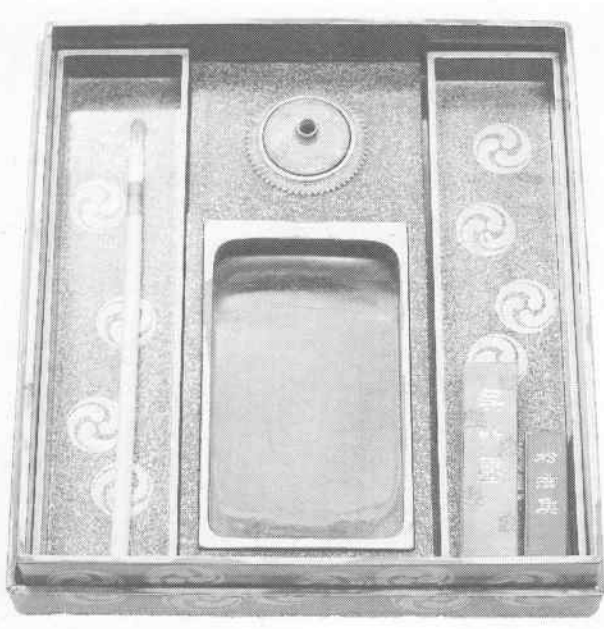
短冊

秋涼しほとけ少なき持仏堂
少き持佛堂

秋涼しほとけ少なき持仏堂

朝焼の空とよもして初鴉
朝焼の空とよもして初鴉

朝焼の空とよもして初鴉



遺愛の硯



雪人選「諏訪俳句古撰」



「雪人俳詩」表紙

膝八や道しへくく代山の月
膝八の難炊魚ゆる手取全
刈ゆすすき四五不ふかき一
き序の西ハ晴れ序 冬は鳥
中序の札との葉より冬は鳥
さまふ念仏ーさや 冬は鳥
冬は鳥 一年 表紙を 雪人自著
冬は鳥 序ありつて 病よりぬれ
サキや 二人連立 善堂 雪人
物飲、刀うらとやとりのくま
月雪や我詩を詠ふ 八十年
昭和廿八年一月十四日
雪人ハナニ 雪漫書

「雪人俳詩」末尾

諏訪新派俳諧の代表

岩本木外(一八七二〜一九一〇)

下諏訪町高木生まれ。諏訪郡下の小学校教員として奉職。

明治三十一(一八九八)年、関紫竹とともに『二葉会』を創設し、

正岡子規に新派俳諧、近代俳句を学ぶ。

明治三十二年『諏訪文学』発刊。

明治三十五年『諏訪新俳句』出版。

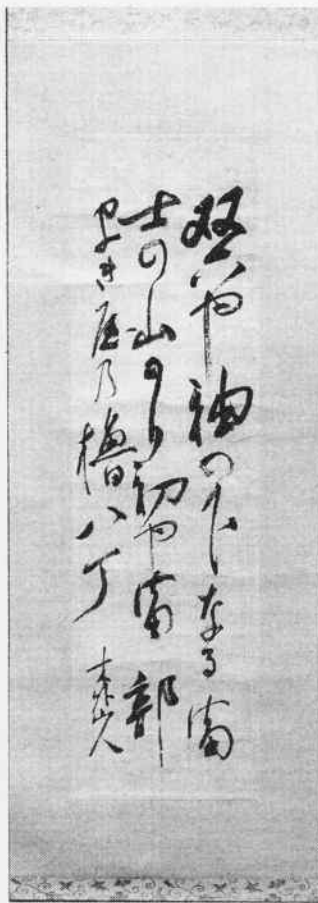
明治三十六年『比牟呂』発刊。俳句の面でその中心的存在となる。「長

野新聞」俳壇の選者となる。

「孝太郎の話」「諏訪軍人鑑」「奥村五百子」など出版。

明治四十三年八月死去、三十九歳。

明治四十五年『木外遺稿』出版。



双六や袖の下なる富士の山 木外



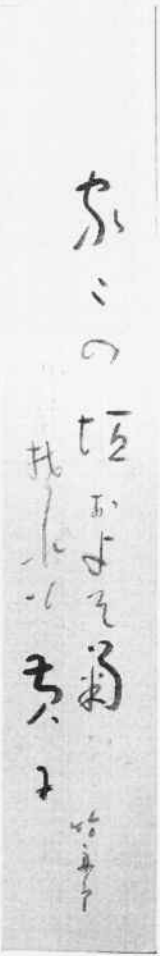
夏瘦せに況や妹の詩三昧 関紫竹



菊枯れてなほ虻蜂の日和あり



わが影や初冬の月のありと知る



家々の垣およそ菊それも黄に

雪人が帰郷したころ(明治三十年代前半)の諏訪の俳句結社

観月会 (湖東) 雪人など

鷺社 (湖南)

時雨会 (永明)

昼寝会 (上諏訪)

芦声会 (下諏訪)

交阿会 (北山) 竹舟郎など

一声会 (上諏訪)

淡社 (平野西堀) 木外など

美篤会 (諏訪中学) 汀川など

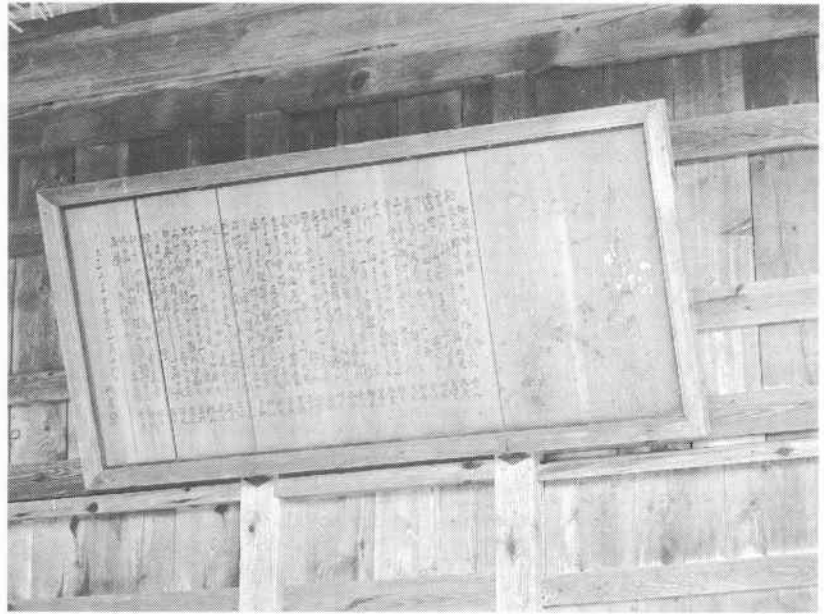
鶯社 (湖南)

大衆詩としての俳諧（旧派俳句）

室町時代末の俳諧連歌から生まれた俳諧は滑稽を中心とする大衆詩であった。芭蕉によって芸術に高められたものの、本質としての大衆性は喪われることなく旧派の俳諧を流れ続けた。芭蕉の一番弟子の其角は俳諧の芸術を守ることよりも俳諧によって現世の榮達を手中にしようとした。俄か分限の紀伊国屋文左衛門の取り巻きであったことはその証しの一つである。

以降俳諧は大衆化、墮落化するに従って芭蕉の存在は対照的に神に近づいていった。芭蕉を神格化することで宗匠たちは墮落を覆い隠そうとしたのである。人々は俳諧に心を寄せ、句作することを「風雅に遊ぶ」と言ったが、それは風雅に遊べる境遇を誇示することを意味していた。いわば武士の帯刀、金持ち階級の銀の煙管（きせる）に相当するものだといえよう。

近世から近代にかけ大衆にとって俳諧は作るより遊ぶ性格のものであった。



福沢御社宮司神社の掲額
第一句目雪人
昭和天皇御成婚を祝して

大正十一年一月七日 信陽新開第二千一十一號

信陽俳壇

天龍吟社第二十卷
阿心庵雪人宗匠選

五 点
初氷透して水の動く見ゆ
雨後や道の霜の初氷
明け近く月落る頃や初氷
忘年の會を持ち込む師庵かな
日曜を忘年会や勤め人
町更けて風の尖るや冬月
山門のいよく高し冬月
老松に草鞋かゝれり冬月
雪除けの薬に小島や冬の梅

一 櫻 瓢 瓢 耕 漁 萍 鏡 瓢
人 郷 水 人 山 村 水 湖 人

十 客
寒梅や障子にうつる鳥の影
軍港のラッパ響くや鷺の飛ぶ

一 柳 葉 明 塘

初氷馬の蹄に崩れけり
水車場のじぶまや今朝の初氷
初氷富士半面の朝日かな
心合ふ人寄て忘年会に會す
八十の歳酔ふたり年わすれ
祖父も来てはう年會の談ひ哉
丘上に志士の一碑や冬月
寒梅と水仙とある机かな
寒ばいに一家擧りて轉地かな
大雪や雪後に給を描く夕

三 光

踏省せる稀人も居て年わすれ
山門に雁啼くや冬の月
梅を見て不二見て年わすれ幾
瓶や村や枝葉に會して年わすれ

一 碧 萍 香 耕 和 交 交 葉 八 透 柳 一
葉 水 雪 山 人 魚 魚 明 界 水 塘 葉
遣 者

▲▲冬季吟を募る
▲上諏訪町阿心庵宛の事

小平雪人略年譜

○明治五(一八七二)年

七月二七日小平家禎三・多よ次男として湖東の上菅沢に生まれる。小平家の祖先は、戦国期甲州の読本(とくほん)で外科を習い、家伝の医家として信州の三名医として知られ「乳のお医者で知られたる小平家」と唄われた。

○明治十一(一八七八)年(満)六歳

中村学校入学↓同卒業↓南大塩学校高等科進学と推定。

○明治十九(一八八六)年十四歳

小学校卒業。兄小平治長野師範入学。保科五無齋と同級。この年上京か? 雪人の上京については次の三説があり定かでない。

1 明治十九年説 藤森修齋(友人)小平鼎(雪人次男)上原痴仏坊(雪人門人)

2 明治二十年説 雪人本人(金井清との対談、高齢ゆえ必ずしも部分あり)

3 明治二十一年説 小平真弓(雪人長男)茅野市教育委員会

○明治二十一(一八八八)年十六歳

受験予備校成立学舎(神田駿河台・漱石もかつて在籍)に学ぶ。英語習得のためか。

○明治二十二(一八八九)年十七歳

三月慶應義塾正科に入学。予科は四番の二より就業であるが、雪人は三番の二に入学。

次男鼎の編纂になる『小平雪人』の年譜にはこ

の年福沢諭吉に可愛がられ『時事新報』『東京日々新聞』の俳壇選者になったとあるが、入学早々であつてみれば福沢との関わりも薄いと思われ誤伝か? 両新聞のマイクロフィルムを閲するにその形跡なし。真弓は明治三十二年として、俳句史的に矛盾がある。

○明治二十三(一八九〇)年一八歳

兄小平治東京高等師範学校進学(あるいは翌年か)。慶應義塾ではこの年大学部を発足させ、文学・理財・法律の三科を創設したが、雪人は大学部には在籍していない。従つて「慶応大学文学部卒業」というのは雪人の学歴としては正確ではない。なお、大学部設置に伴い正科・別科を「普通科」と呼ぶこととなる。

前年度の入社帳には名前が「探一」ではなく「彌一」となっているが、誤記ではなく徴兵制に対応しての故意の記入であつたようである。

○明治二十四(一八九一)年一九歳

五月より普通部予科より正科に進級。成績に出席日数が加味されるため成績は必ずしも芳しくない。阿心庵永機の旧派俳諧に入門し、学業より俳諧に熱心であつたためと思われる。

○明治二十五(一八九二)年

二期正科より別科へ転向。在塾中諭吉の俳号雪池から一字を得て雪人と号す。諭吉の別荘に出入りし、社会主義者等とも交わる。

○明治二十六(一八九三)年二十一歳

四月慶應義塾普通部別科卒業。英国の移民会社に就職の意向も身体検査で不備となり、師永機より立机(一人前の俳諧師となること)を認められ阿心庵門下の晋雪人を名乗り、業俳(プロの俳諧師)として芝の紅葉館を主として貴紳に交わる花形となった。

○明治二十八(一八九五)年二十三歳

三月『東京日々新聞』には阿心庵永機とあり、十月『女学雑誌』にも「阿心庵中にありては晋雪人」とある。阿心庵継承は既定の事実として、なお襲名には至らなかつたようである。十月長野師範学校教諭(教授)を勤めていた小平治が突然逝去。

○明治二十九(一八九六)年二十四歳

五月の『新々明治発句百家撰』になお阿心庵永機とあるが、三月『東京日々新聞』の「文苑」の俳句欄は雪人選、十月の『時事新報』の「楓山日抄」も雪人主宰であり、この年の春頃から実質の阿心庵を継承したものとされる。

森鷗外の未発表草稿に当時の俳派として日本派(子規等)、秋声派(巖谷小波等) 大学派(大野洒竹等)とともに雪人派として四大派閥の一つに数えている。子規は改革派、小波・洒竹は改良派、雪人は其角以来の伝統(旧派)俳諧である。

○明治三十(一八九七)年二十五歳

二月「俳諧同志倶楽部」の発足に際し、老鼠

堂永機・阿心庵雪人とあり、正式に阿心庵を襲名したらしい。ただし永機との確執があったらしく、阿心庵は自分一代で廃絶の意を表明。永機との養子縁組を解消し小平家の相続人として帰郷。

兄小平治の遺品(蔵書、土器・石器など)を収蔵した「龍谷文庫」を生家につくる。

師永機とともに校訂した『芭蕉全集』(俳諧文庫第一編)を博文館より出版。『校註蕪村全集』出版。『読売新聞』に「近世俳人譚」を連載する。『沢庵和尚全集』を編集刊行。

○明治三十一(一八九八)年二十六歳

阿心庵を龍谷文庫に並べて建てる。『校訂其角全集』刊行。

明治三十二(一八九九)年二十七歳
笠原うたと結婚。

○明治三十四(一九〇一)年二十九歳

『笠家庵全集』『正阿句集』刊行。長男真弓誕生。雪人は二男二女の父親で、長女つゆ(明治三十六年生)、次男鼎(明治三十八年生)次女こう(明治四十二年生)。

○明治三十六(一九〇三)年三十一歳

農閑期、自宅で山浦地方師弟のため《湖東義塾》開設。(三十九年まで)

○明治三十七(一九〇四)年三十二歳

尾崎紅葉句稿の編集に参加。『南信評論』俳欄選者となる。師永機死去。

○明治四十二(一九〇九)年三十七歳

長崎県の壱岐勝本にて河合曾良二百回忌を挙行。

○明治四十三(一九一〇)年三十八歳

大逆事件発生し関連(幸徳秋水に宮下大吉を紹介したとの嫌疑)ありとして以後七年間尾行がつく。和歌山、長崎、新潟などを流転する。

○大正三(一九一四)年四十三歳

渡辺千秋の助言により漸く嫌疑解け、上諏訪町湯の脇に住むことになる。以後諏訪の地に腰を据え、本格的俳人活動に入る。

○大正四(一九一五)年四十三歳

福沢諭吉の先祖の福沢村善徳屋敷跡を豊平村福沢と指摘。『信陽新聞』創刊。俳欄の選者となる。『龍門紀伝』を連載する。また『南信日々新聞』の俳欄選者ともなり、多くの人材を育成する。

この頃より俳句の世界は虚子主宰の『ホトトギス』全盛時代となる。客観的に見れば雪人は田舎の旧派の一宗匠にすぎない。

○大正十(一九二一)年四十九歳

『阿心庵句帖』出版

○大正十三(一九二四)年五十二歳

『諏方大明神絵詞』古写本により校訂・刊行する。

○大正十四(一九二五)年五十三歳

『一茶八番日記』の整理・写本をするも手違

い等あって出版に至らず。

○昭和三(一九二八)年五十六歳

「石器時代文化展覧会」に長野県代表として龍谷文庫の所蔵品を出品する。

○昭和四(一九二九)年五十七歳

伏見宮博英王、石器時代調査のため諏訪へ来られる。龍谷文庫見学。発掘の指揮を雪人が執る。雪人の俳句の弟子で牧馬会に所属していた南大塩の宮坂英弼は泉野小の生徒とともに応援に駆けつけ、考古学の魅力にとりつかれる。宮坂にとって俳句も考古学も雪人が師匠であった。

上諏訪の町中を転居。昭和五年弁天町、同年湖柳町。

○昭和十九(一九四四)年七十二歳

『雪人俳詩』出版。

○昭和二十(一九四五)年七十三歳

強制疎開のため湖東の自宅に帰る。

○昭和三十三年(一九五八)年

十二月逝去。数え齡八十七歳。自家の墓に葬る。

小平雪人と諏訪の俳人たち 展示目録へ1

番号	展示品	筆者等	内容	備考
1	拓本	小平雪人	天地の中にもものありふじの山 山寺の西に垣なき桜哉	当館蔵
2			古里や軒端にかかる天の川	当館蔵
3			犁を載せて帰る小船や梅の花	当館蔵
4	軸・拓本	小平雪人	ひとつまみおごる菫の幾所	当館蔵
5		諏訪蘭幽	袂から春は出でたり松葉銭	当館蔵
6		河合曾良	河合曾良松島巡行図	個人蔵
7	軸・半折	藤森素槩	俳画四葉	当館蔵
8	図版	藤森素槩	扇面二葉・半折二葉	当館蔵
9		加藤暁台	曾良二百年忌追福『故郷集』	当館蔵
10	冊子	竹田凍湖編	河合曾良肖像(芭蕉堂歌仙図内)	当館蔵
11	複写	李郭画	鶯は昨日もどりてけふ老ぬ	個人蔵
12	軸・半折	河合正阿	『正阿句集』	当館蔵
13	冊子	小平雪人編	河合正阿肖像(正阿句集内)	当館蔵
14	複写		俳画其残曼荼羅・三句	個人蔵
15			俳画・五月雨もはるるか雲のもどり来る	個人蔵
16	軸・全紙	岩波其残	其残十二月月画手本	個人蔵
17	複写	岩波其残	其残追善集『花の山』	当館蔵
18	冊子	山田敦夫編	其残句碑建立趣意書	個人蔵
19	複写	久保島若人	色紙一枚・縣幅	当館蔵
20	図版		散りそむるうらとおもてや山桜	当館蔵
21	連板	中野銀岱	西行法師像(芭蕉堂歌仙図内)	個人蔵
22	軸・半折	宝井其角	宝井其角像	個人蔵
23	複写	李郭画	空の底と幟の先は山桜	個人蔵
24	軸・半折	阿心庵永機	夜や秋や思ひ惑はで月一つ	個人蔵
25	軸・中床掛	阿心庵永機	“阿心庵雪人 上諏訪町”	個人蔵
26	名刺		不二晴れて雪中の春を領しけり 他二句	個人蔵
27			冬ごもり一羊裘をたからかな 他一句	当館蔵
28	軸・半折	小平雪人	雪の日やひとの呉れたる湊筒 他一句	当館蔵
29			木がらしや竹を画かば十万竿	個人蔵
30	扇面	小平雪人	山寺や猿も経聴く秋の風	個人蔵
31			漢詩・草の戸や十日の菊に人集め	当館蔵
32	軸・全紙	小平雪人		当館蔵

番号	展示品	筆者等	内容	備考
33	色紙	小平雪人	生花に糸引きかけし蚕かな	個人蔵
34	硯箱一式		ほととぎす筆硯けふも潤ひて	個人蔵
35	葉箱		雪人使用の硯筆墨	個人蔵
36			医家小平家伝来の葉箱	当館蔵
37	複写		雪人撰『諏訪俳句古撰』表紙	茅野市図書蔵
38	連板	小平雪人	大寺の厠は寒し虫の声	当館蔵
39			人語よくきこえてすめり秋の山	当館蔵
40	色紙	小平雪人	高僧の辻説法や春のくれ	個人蔵
41			梅に鶴百年寒さ知らぬ也	個人蔵
42			古里や別に春あるははが家	当館蔵
43	軸・半折	小平雪人	山芭蕉手折らんとすれば雲起る	当館蔵
44	冊子	小平雪人	雪人俳詩(自筆)	個人蔵
45	軸・中床掛	小平雪人	太刀佩いて神の渡るや春の水 他三句	個人蔵
46	色紙	小平雪人	御柱のしるき宮居や寒の梅	個人蔵
47	扇面	小平雪人	復興は芸術よりぞ国の春	個人蔵
48		小平雪人	古里や軒端にかかる天の川	個人蔵
49		小平雪人(五十五歳)	夏山に吾慮を愛すひとりかな	個人蔵
50	軸・全紙	小平雪人(八十七歳)	宮下正岑「勸農の詞」	当館蔵
51	文台(机)		宮下正岑「勸農の詞」	個人蔵
52			小尾俎杖に与えられたもの	個人蔵
53			荒海をおさえて昇る初日かな	個人蔵
54			皇紀二千年の初日かな	個人蔵
55			今落ちし一葉をわたる嵐かな	個人蔵
56			末がれやきのふ越えたる宇都の山	個人蔵
57	短冊	小平雪人	臘人や道に入るさの山の月	個人蔵
58			徳本の念仏も雨の十三夜	個人蔵
59			此菊によき名選ばん後の雛	個人蔵
60			菊置て故園の春や後の月	個人蔵
61			秋風や畳を掃いて又眠る	個人蔵
62			水晶の文鎮置きて吉書哉	個人蔵
63			文月やこの明月は女の夜	個人蔵

小平雪人と諏訪の俳人たち 展示目録へ2

97	96	95	94	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	番号		
			写真						複写		扇面		複写		書簡		写真		色紙				ブロンズ像	軸・中床掛						短冊					展示品	
											小平雪人		小平雪人		笠原嘉次郎		小平功		小平雪人				長田平次	吉川秀山						小平雪人					筆者等	
																																				内容
																																				備考

119	118	117	116	115	114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	番号	
図版	軸・半折	軸・書簡	軸・半折	冊子	軸・半折			短冊			軸・中床掛				複写					写真		複写	展示品
	関紫竹	岩本木外	岩本木外	両角竹舟郎	両角竹舟郎			両角竹舟郎			両角竹舟郎	句誌『乙鳥』	信陽新聞	東京日々新聞			読売新聞	南信日々新聞		当館撮影		伊藤早雲写	筆者等
	夏瘦せに況や妹の詩三味	森山汀川あて(明治三十六年頃)	双六や袖の下なる富士の山	句集『北山』	雪峯を天の垣とす紅葉茶屋			わが影や初冬の月のありと知る			別れつつなほ羽子ついて帰るなり 他四句	雪人選「信陽俳壇」	『龍門紀伝』第一百十二回分	俳句大募集広告			近世俳人譚第一回、二回分	雪人の母多よ九十二歳談		豊平福沢御社宮神社掲額の冒頭拡大写真		湖東新井胡桃沢神社掲額の俳句	内容
	個人蔵	個人蔵	当館蔵	個人蔵	当館蔵			当館蔵			当館蔵	当館蔵	諏訪市図書蔵	静岡県立中央図書館蔵			当館蔵	当館蔵		当館蔵			備考

小平雪人と諏訪考古学の黎明

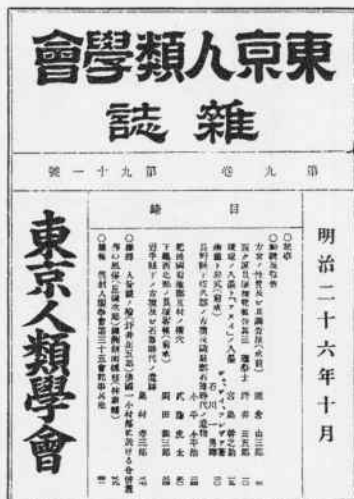
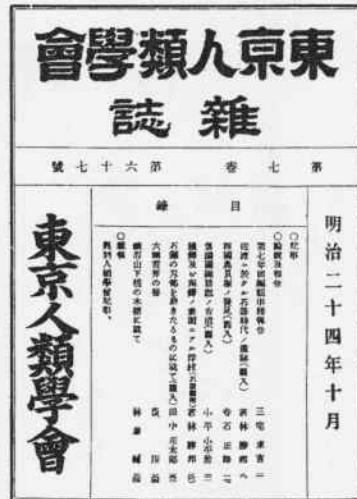
小平雪人が東京で、そして諏訪へ帰郷後も俳諧人として活躍したことは、多くの知るところであり、今回の企画展においてもその活動については詳細に展示が行われています。一方で、雪人は考古学の分野でも諏訪地方に大きな影響を与えています。その活動はわずかに尖石縄文考古館に「尖石遺跡の発掘を長年手がけた宮坂英弐氏を考古学に導いた人」として紹介されているにすぎません。

今回、企画展「小平雪人と諏訪の俳人たち」にあわせ、雪人の考古学の分野における活動に注目しました。

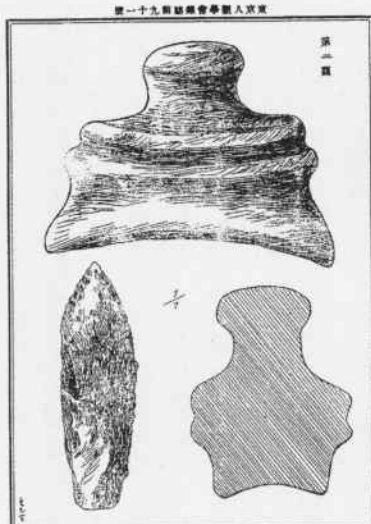
兄、小平小平治と諏訪考古学の黎明

雪人の兄小平治は、長野初等師範学校を卒業後、東京高等師範学校に学び、後に日本考古学会を設立した教授・三宅米吉を指導者に、同級生には東京帝室博物館歴史課長となった高橋健自がいて、刺激を受けつつ考古学への志を深めました。この間、東京人類学会誌に尖石遺跡を初めて紹介するなど、いわば県内では最初の考古学者としての活躍が期待されました。しかし、長野師範学校の教授として帰郷後まもなく、二十八歳の若さで急逝してしまいます。

また、弟の雪人も小平治の影響を多分に受けて考古学に関心を持っていたことが、小平治逝去後の活動や考古学者との交流から伺われます。



学生時代に論文を発表



東京人類学会雑誌の挿図

資料の中には後に帝室博物館の所蔵となった石冠もある。

兄、小平小平治の死と諏訪への帰郷

そして龍谷文庫の創設

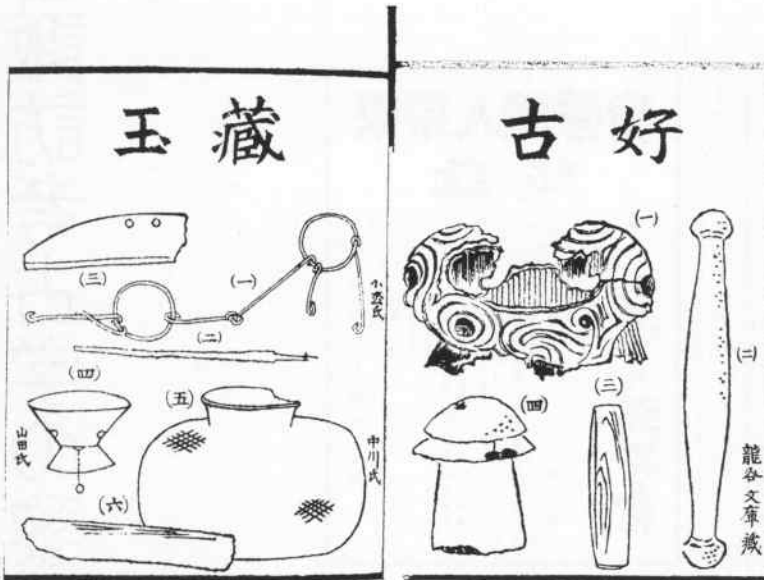
小平治の両親や雪人は兄の死を悼み、生家に龍谷文庫を創設し、蔵書や収集品を展示しました。また東京に学んだ雪人は、兄の死を契機に帰郷して、俳人としての活動の傍ら、考古資料の収集につとめました。

この龍谷文庫は、俳句の弟子である小澤半堂によって出版された「洲羽土産」のなかに紹介されています。そして、地域の人たちには博物館的な施設として、広く貢献するようになっていきました。

雪人の帰郷後、諏訪の俳諧は大いに盛り上がりますが、同時に多くの俳人が考古学に関心をもち雑誌に論文を掲載しています。雪人自身は考古学の論文を書いた記録はありませんが、こうした諏訪地方の考古学黎明期が、兄小平治の影響で、中央の学会に広く人脈を持っていた雪人によってもたらされたと推測されます。

『洲羽土産』に見る龍谷文庫

明治三十五年、小澤半堂により出版された『洲羽土産』には龍谷文庫が紹介されています。資料には、縄文時代の資料の他、古墳時代の須恵器や土師器、鉄製の馬具なども見受けられます。資料には龍谷文庫蔵の他、小森氏、中川氏、山田氏の添え書きも見られますが、寄贈者でしようか。出土地などの情報が記されていないのが残念です。



雪人と曾根遺跡

曾根遺跡は明治四十一年に、橋本福松により発見された諏訪湖底遺跡で、翌年には坪井正五郎博士をはじめとする調査団が組織され、県内初の学術的な考古学調査が行われました。この調査には地元からも発見者である橋本のほか、小澤半堂（孝太郎）など、諏訪の俳諧で活躍していた人々が駆けつけますが、いずれも雪人によって考古学の影響を受けた人々です。この時には、山浦にいた雪人自身の参加の記録は残されていませんが、後に自ら調査に当たったことを、現在東京国立博物館に残されるこの石鏃が明らかにしています。

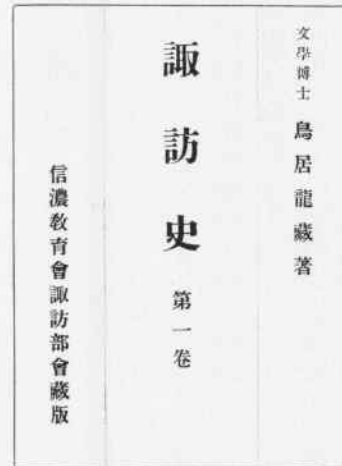
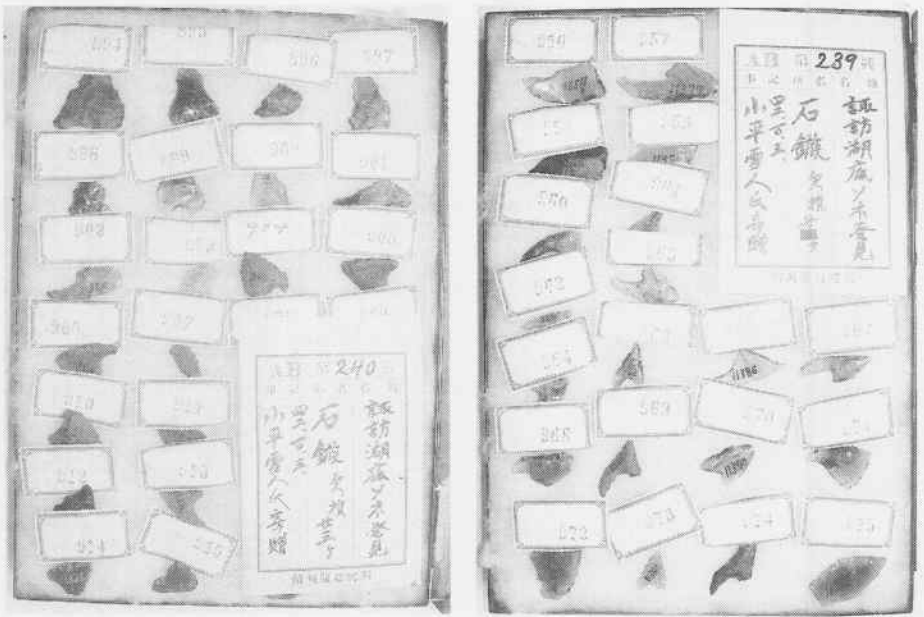
雪人は、大正九年の鳥居龍蔵博士の『諏訪史』第一巻の編纂に伴う調査にも橋本福松・八幡一郎らと共に参加しています。



東京国立博物館に収蔵されている雪人寄贈の曾根遺跡出土石鏃

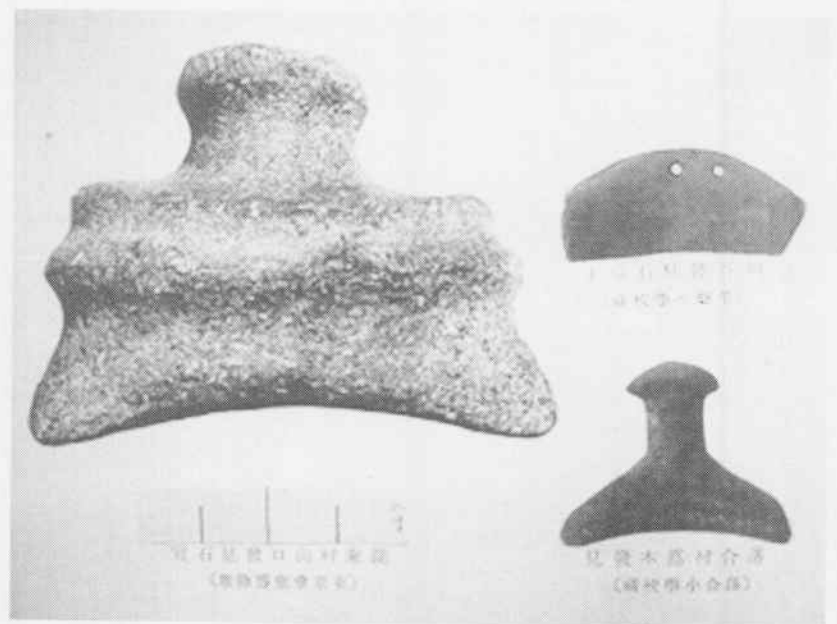
三上徹也氏撮影・提供

『諏訪史』第一巻に見る龍谷文庫
 大正一三年、信濃教育會諏訪部會によって刊行された鳥居龍藏著『諏訪史』第一巻にある「諏訪郡先史時代遺物発見地名表」によると、所在（所有者）の欄に湖東村龍谷文庫の他、上諏訪小平雪人、南大塩村小平定太（小平治・雪人の弟）の名前も見ることができます。このことから、小平治の逝去後、弟たちが考古資料の収集に努めていたことがわかります。



『諏訪史』第一巻中表紙

写真は『諏訪史』第一巻より転載





(藏氏大定平小) 見發澤菅下村同

雪人と諏訪考古学

小平治と雪人の、龍谷文庫を飾った収集品は、昭和三年に東京高島屋で開催された展覧会に出品され、高い評価を得ました。これが機会となり、翌年の伏見宮博英王殿下の諏訪地方への考古学調査が実現します。

昭和四年、雪人の案内による殿下の諏訪地方への考古学調査が、十日間に及んで行われました。この間、尖石遺跡をはじめ、中ッ原遺跡、曾根遺跡などを調査されました。

この調査に雪人の俳句の弟子である宮坂英次



(藏氏人雪平小) 見發蒔花村東湖



龍谷文庫を訪れる伏見宮博英殿下

も参加し、これをきっかけに考古学に関心を持ち、長年にわたる尖石遺跡の発掘調査が始まったことは、あまりにも有名です。
雪人は殿下を、曾根遺跡にも案内しています。この調査には殿下と同年であった十八歳の藤森栄一も参加しています。藤森少年にしても、後に考古学者として活躍する大きな契機となったことを自ら書き残しています。

文責 小林深志

展示した龍谷文庫の考古資料（尖石縄文考古館蔵）

番号	品名	種別	遺跡名	解説
1	横瓶（よこべ）	須恵器	不明	水や酒などの液体を入れる容器。副葬品として用いられることが多い。『洲羽の土産』には中川氏の添え書きがある。
2	高坏（高坏）	土師器	不明	お供えに利用される。
3	甌（こしき）	土師器	不明	蒸し器。甌などと組み合わせて使用される。
4	はそう（瓦+泉）	須恵器	不明	胴部に穴が開けられている。竹などを挿して液体を注ぐ。
5	壺	須恵器	不明	
6	三角柱形土製品	土製品	豊平下菅沢	貫通する穴が特徴。用途はわかっていないが、何らかの祭祀に用いたものか。
7	注口土器	縄文土器	湖東花蒔	『諏訪史』第一巻に小平定太氏蔵とある。
8	浅鉢	縄文土器	北山	竹を挿入する穴が開けられている。
9	石器標本箱	石器	各地	『諏訪史』第一巻には復元実測図が掲載されている。
10	深鉢口縁部	縄文土器	北山浦	主に磨製石斧が入れられている。墨書で「南」と書かれているものに「尖石」の紙が貼られている。
11	標本箱	石器、骨角器、貝製裝飾品	各地	「北長」とあるのは北山長峯遺跡か。
12	標本	石器	各地	『諏訪史』第一巻掲載時には漆で接合されていたが、破損。
13	縄文土器破片	縄文土器	「長」	磨製石斧、打製石斧、横刃形石器などの石器、骨角器、貝製裝飾品などが見られる。
14	縄文土器破片	縄文土器	「荒」	小型の石器には、地元産の黒曜石の他、様々な石材が利用されている。
15	縄文土器破片	縄文土器	「立」	縄文時代の各時期の石鏃が収納されている。中には「尖」「大和」など朱書きされたものもあるが、ほとんどものには採集地が記されておらず残念。
16	縄文土器破片	縄文土器	「尖」	「長」と朱書きされている。
17	土錘・土器片錘	土製品・縄文土器	「大和」	北山長峯遺跡か。
18	浅鉢	縄文土器	八田在家	「荒」と朱書きされている。
19	石匙	石器	松ハラ・松原	『諏訪史』第一巻に写真が掲載されている。玉川荒神か。中御前遺跡あるいは下ノ原遺跡が該当するか。
20	標本	石器	各地	「立」と朱書きされている。

雪人展の考古部門については、三上徹也氏に多くの指導をいただいた。また、当時の新聞記事や東京国立博物館収蔵資料の写真についても提供をいただいた。